

目的 近年の国土開発が高度経済社会の形成を指向して、国民生活環境に有形無形の影響を及ぼしてきたことは誰しも痛感する問題であるが、中でも我々が民族の文化との対話を持ち得べき史跡に関する問題は深刻である。この研究はかかる問題に対応するものとして各地にその例を見始めている史跡緑地の利用実態を検討し、史跡緑地のあるべき姿の研究を通じて、生活環境のひとつの要因をなす歴史的文化的文化財のあり方を考えていく。

方法 福井県福井市にある一乗谷朝倉史跡は戦国時代末に加越若を領した朝倉氏の城下であり、その遺跡も多く、面積3km²近くが国指定特別史跡という全国に例のない史跡緑地であることに注目し、昭和52年を通じて夏秋の平休日4日間、出入者数調査・駐車台数調査・来訪者の滞在実態や行動実態の視認調査・来訪実態や意識の質問調査などを試み、さらに過去10年近くに及ぶ諸調査との比較など諸分析を行なった。

結果 入園者数の平均は休日1200人・平日400人前後で、性別では男子が多く、年齢別では諸公園緑地と比較して壮老年層が多いなどの傾向が見られた。質問調査の結果では、来訪者の居住地分布について70%以上が福井県越前地区であること、来訪目的について60%以上が見学・観光であり、これらの来訪者には中世城館建築の復原や説明案内の充実ならびに環境保全の希望が多いのに対し、40%に近い休養・運動などのための来訪者には芝生園地や遊戯施設の整備の要求が多いなど、来訪目的・居住地(来訪距離)・来訪回数・満足度・希望意識などの課題領域の相互に独自の傾向が、生活環境の層別に対応する史跡緑地のあり方とともに調査の一部の分析によって、明らかとなった。